

# 浦賀文化

第 31 号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

## 三浦按針



江戸時代初期、日本にきた最初のイギリス人「青い目のサムライ」ウイリアム・アダムズ。日欧交流の架け橋となった。

日本名を三浦按針として知られるウイリアム・アダムズは、慶長五年（一六〇〇）、我が国に初めてやってきたイギリス人です。二年に及ぶ困難な航海を経て、オランダ船リーフデ号の乗組員の一人として、豊後国（大分県）臼杵湾佐志生に來航しました。

一五六四年アダムズはイギリスのケント州ジリングラムという小さな町に生まれました。幼いころから海と船に憧れを抱いて育ち、十二歳のときからロンドン郊外の造船所に奉公するかたわら、独学で天文、幾何、造船、航海、砲術などを学びました。その後、自ら設計した軍艦の艦長としてイギリス海軍に加わり、一五八八年、世界最強を誇るスペインのアルマダ（無敵艦隊）の撃退に貢献しました。一五九八年六月、アダムズは五隻の船団で編成されたオランダの東洋遠征隊の航海長として旗艦ホープ号に乗り組みました。しかし、この航海は難航を極め

ました。アダムズは途中からリーフデ号に移りましたが、大嵐で船団は散り散りになり、ついにリーフデ号一隻だけが、日本を目指すことになりました。

慶長五年三月、佐志生黒島沖にたどり着いたリーフデ号は、マストが折れ、帆も破れて、百人いた乗組員のうち生存者はわずかに二十四名でした。当時、臼杵藩主を勤めていた太田重正はアダムズの來航目的が日本との交易であることを、大坂城にいた徳川家康に報せました。

江戸に幕府を開き、將軍となった家康は、大坂から堺に移動していたアダムズを呼び寄せました。しかし、途中、船の傷みが激しくなり、浦賀に入港、その後、陸路で江戸に入りました。

家康はアダムズに日本橋の屋敷を与え、外交顧問として重用しました。さらに、慶長十年には相模国三浦郡逸見村に二百石余りの領地を与えるとともに、旗本として召し抱え、三浦按針と名乗らせました。

「按針」というのは、水先案内人を意味する言葉です。

家康から洋式船の建造を命じられたアダムズは伊豆国伊東で二隻のスクーター型帆船を進水させました。

ちょうどそのころ、フィリピンに駐留していたメキシコの前総督ロドリゴ・ビベロの船が、帰国の途中難破し上総国（千葉県）御宿に漂着しました。このとき、アダムズが建造した船が提供され、ビベロの帰国を助けました。この航海の際、家康の命により京都の商人・田中勝介ら日本人も乗船し、メキシコに渡りました。日本船の太平洋横断航海としては、幕末の咸臨丸による快挙に先立つこと二百五十年ほど前のことです。

また、アダムズは、逸見村とは別に東浦賀にも屋敷を与えられ、スペインとの貿易に従事していたという記録が残されています。

しかし、二代將軍秀忠の時代になり、幕府の方針が鎖国政策に向かっていくと、それにつれて、アダムズの活躍の場は失われていきました。

一六二〇年五月、日本に来て二十年、アダムズは長崎の平戸で五十六歳の生涯を閉じました。

さて、アダムズは何度となく故郷に手紙を書き、日本の地理や社会情勢などを知らせていました。『ガリバー旅行記』の作者スウィフトは、その手紙を参考にして日本について書いたのではないかと言われています。それは、『ガリバー旅行記』にガリバーが日本に立ち寄ったことの記述があることから想像できます。

また、ガリバーが日本に上陸したのは、私たちの郷土・横須賀市内、観音崎ではないかと考えられています。この物語は、今年度（平成二十四年度）から中学二年生用の英語の教科書に英文で紹介され、郷土・横須賀の持つ新たな魅力を全国に発信しています。

なお、毎年十一月に行われる「観音崎フェスタ」では、ガリバーに扮した長身のアメリカ人男性と幼稚園児との楽しいイベントが好評を博していますので、ぜひお出かけください。

スクーター：二本以上のマストに縦帆を備えた西洋式帆船。

### ★参考資料

- ・「続横須賀人物往来」（公財）横須賀市生涯学習財団
- ・「新横須賀市史 通史編・近世」横須賀市



# 歴史語らい座・浦賀 三十一

郷土史家 山本 詔一



## ●加藤山寿と竜崎戒珠●

相模国三浦郡西浦賀村（現・横須賀市西浦賀）の鎮守・叶神社の参道に面した所で塩問屋を営んでいた淡路屋という店があった。淡路屋は主人になると小兵衛の名を踏襲していたらしく浦賀では通称「淡小」と呼ばれ、浦賀に奉行所が移転してくる享保五年（一七二〇）より前から営業をしていたことがわかっており、西浦賀の問屋の中でも最も古い店の一つであった。

さて今回の主人公の加藤山寿は、生年はわかっていないが、幼名を勇助といい、文化二年（一八〇五）に、家督を子の常五郎に譲り、西浦賀村の高坂（現・西浦賀三丁目）の花水戸という所へ隠居した。隠居生活を始めた正確な場所はわからないが、隠居所の近くに「天女水の碑」という高さ五十七センチほどの石碑があり、この碑文を山寿が記している。

文で刻まれている。

この碑ができたのは、文化九年九月であり、山寿が『三浦古尋録』の序文を書いた翌月のことであった。

山寿の著作活動は隠居直後から精力的に行われたとみえ、著書に『西国観音記』『漂客雜記』『東奥一覽』『東海絵図』『源画易解』などがある。これらの著作は昭和四十二年に刊行された『三浦古尋録』の解説に掲げられているもので、校訂者は（おそらく高橋恭一氏であろうが）、西国観音記は見ているものの他の著作には関しては、「観音記」の末尾に記されているという記述だけである。現在『国書総目録』をあたってみても、「古尋録」以外の著作は見当たらない。もちろん版本ではないので、数多く出回るようなものではないが、どこかに秘蔵されているのであれば、目を通してみたいものである。

た人物があり、現在伝わっている「古尋録」も山寿のものとは竜崎戒珠が増補した二系列が伝わっている。

増補した竜崎戒珠は横須賀の大津村池田（現・横須賀市池田）の人で、どこで学問を修めたのか明らかではない。戒珠も号であるが古尋録の増補の時は攀鯉という号を使用し、さらに慧光という号も使っている。著作も「古尋録」の増補版のほかに『菅相伝』『三浦諸仏寺院回詣記』『新編三浦往来』『湯の沢温泉実験記』などがある。『新編三浦往来』は「往来物」と呼ばれて寺子屋の教科書に多く使用されたもの、三浦半島の地名を学びながら漢字を覚え、地理、産物や名所まで学ぶものであり、「古尋録」の増補版をやったことが生かされたものと思われる。

## 笑話一題

涼しくなり旅行が好きな人には良い季節になってきました。私がよく行く国は、一年中暑い国「タイ王国」です。

タイ王国は立憲君主制の国で国王がいます。国王が国民から慕われている国で、国王の写真が国旗とともに至る所に飾られています。

タイ王国は、アジアで日本と同じくヨーロッパの植民地にならなかった国で、経済も発展していて東南アジアで中心的な立場にある国です。

『ほほ笑みの国』と言われるように、人々は優しく、特に日本人には親しみ深く接してくれます。仏教国で至る所に寺院があり、金、ルビ、螺鈿、硝子等がふんだんに使われ、きらきらと輝き本場にきれいです。祭つてある仏像もすべて金箔張り、地方によって顔が少しづつ変わっているのもおもしろいですよ。

昔から、タイと日本は密接な関係があり第二次世界大戦でも友好国でした。今では、多くの日本企業が生産拠点をタイに置いていきます。そのため、日本人も多く生活しており、電車などで日本語の会話が時々聞こえてきます。現地でも生活している人の多いのに驚きます。

おすすめの前節は十二月から二月です。乾季のため雨がほとんど降らず、タイでは涼しい季節になります。日本は寒い時期ですが、Tシャツ、半ズボンをお忘れなく。

浦賀コミュニティセンター

## 講座開催のお知らせ

### 「セピア色の浦賀」

西浦賀編(11/9)・吉井編(未定)

地元在住の方に地名の由来・屋号などのお話を聞いた後、付近の神社仏閣を訪れます。

### 歴史講座「浦賀物語」

12/7. 14. 21, 1/11. 18(全5回)

初心者向けの歴史講座を開催します。古代～幕末までの浦賀の歴史を学びます。

\*\*\*\*\*

広報よこすか、浦賀 TODAY 等で募集を行います。ご興味のある方は、是非お申込みください。